

掘りかへし耕しなほす時

——六朝文学研究の展開の契機として読む

大上 正美

著者林田愼之助は一九六〇年代から精力的に六朝文学の論考を発表しては、足を踏み入れたばかりの中国文学研究と「文学」を考えることとの大きな乖離に戸惑う私たちに多大の刺激を与え続けた。阮籍、嵇康、張華、左思、郭璞の魏晉詩人論からはじまり、ほどなく「六朝文学に現れた志と情の問題」など六朝の文学論研究に力を注ぎ、それらは『中国中世文学評論史』（一九七九年二月 創文社）としてまとめられた。そこでの著者の関心の動機が「自序」で次のような一節に語られている。

（それまでの研究は）「個別の文芸理論をささえる美意識や倫理観の由来が、それを生み出した批評家内部の問題として有機的にとらえられていない。批評家の生活と思想のいとなみのなから、文芸理

論の生成過程と、その立論の必然的な契機が分析されていない憾みがある。」「本書において、詩と散文にわたる文芸批評学の生態分析のみならず、私の好みに偏してではあるが、魏晉期の詩人群の思想に照明をあててきたのも、この時代の文学の実態を多少とも明らかにしたいがためであった。」

その後多方面に著者の関心は広がって多くの著書が世に出たが、この度著者の原点（原点のまた原点は魯迅であるが）とも言うべき六朝文学研究についての発言が十二章仕立てでなされ、私たちに新たな感慨と指針を与えてくれた。同じ課題を担う者がたたく受けとめ後に継承していく営みの上からも紹介し、簡単な論評を示しておこう。

林田愼之助著
六朝の文学 覚書A5判 318頁
創文社 [3360円]

第一章 曹操の挽歌

——歌から詩への変容

曹操の挽歌二首が「漢代民間歌謡の様式を襲いながら内容は異質で、」そこに史詩として「薤露」では「後漢王朝の葬送歌」（前段では何進、後段では董卓を歌いこむ）、「蒿里行」では「民衆兵士への葬送歌」（亡国の民の悲哀を主題とする）と化する。「ここに歌から志を詠ずる詩への変化が見られる。」また曹植「泰山梁甫行」でも「辺境の地で貧苦にあえぐ人民の姿」が描かれ、「現実を告発する詩篇を多く残した建安の楽府体文学に通底する変容でもあった」と結ぶ。漢から魏詩への文学史的な断絶を埋める、その展開の一つの様相の提示となっている。

第二章 建安詩人における自然描写の写

実性

それまでの詩作品における自然は「人事の悲哀の情をうたう背景であったり、あるいは人事をうたい起こす比喩として描かれてい」るにすぎなかったが、魏晉になって「写実性の強い自然描写を獲得する」。曹操の「観滄海」には「碣石山に登ったときの秋のきびしい自然の光景」、「苦寒行」では冬の苦難に満ちた太行山行軍の冬の写景、王粲の「七哀詩」其の一の「乱世の悲惨な光景」、其の二の長江を溯るさいの「黄昏せまる兩岸の自然の景色」等。とくに王粲の詩にコメントして、「乱世のなかを漂泊せねばならなかった詩人にとって、山水自然の景觀は、寂寞にとざされた異邦人である自らの心象風景とかさなっていたにちがいない。」という。また一方で曹丕や曹植、劉楨らの苑遊の諸編には「目にふれ、心にとめておいたおだやかな自然のたえずまい」「こまやかな自然描写」「美麗な対句」「綿密でリアルな」描写が出現し、やがて「山水自然の写景に意識的にとり

くんだ」劉宋の謝靈運の「先驅的革新的な役割をはたした」と結ぶ。

建安詩の中に、「何を深く鋭くうたうか」と「いかに整って、美しく、リアルにうたうか」という、六朝詩の流れの基点を認めているのである。私たちの課題は、「写実」の語そのものの吟味と、さらには巧似・形似との関係でそれを捉えかえして六朝詩史の一面を示すことであるう。

第三章 曹植の奇想詩とその系譜

——危機意識をめぐって

「常識ではとても思いつかない発想の詩」を「奇想詩」と呼び、曹植詩からの系譜をたどる。「キーワードは「危機の意識」である」とする。曹植の「野田黄雀行」と「吁嗟篇」の「奇想詩」たる所以を分析し、「泰山梁甫行」に現実参加の視線をみる。以下にその系譜をたどり、阮籍「詠懷詩」其の三の「一身すら自ら保たざるに、何ぞ況んや妻子を恠いんや」の「突出して、奇にうつる」句には「この時代の危機的状況の意識」があるとする。郭璞の「人生への絶望が」「遊仙詩」

の「変身の歌をつむがせることになった」し、また陶淵明の「山海経を読む」連作は幽憤の詩であり、危機意識の産物であるとする。

本書が企画されて久しいが、評者が楽しみにしながら想いえがいたその一冊は、著者の基盤としてあった魏晉の詩人論による六朝詩の流れがどのように深化するか、他ならぬこの章を基核としたものであったが、それを著者は「奇想詩」なる用語でその流れを語った。奇想詩たる所以に危機意識が張り付いている、とするのは著者の若い頃からの終始手放さない文学視点であり、六朝文学研究の王道である。現実との激しく危うい関係を深く抱えもって詩人は表現者として自立し、奇想詩をつくった。これを契機に私たちは、このような奇想詩をつくらねばならなかった表現の必然性、それは表現へと向かわざるを得ないデーモン故の産物でもあり、それ故にこそ虚構への再考に本格的に取り組む場へと出て行くことが必須となる。またその奇想詩がどのような現実を逆転させるかの問いの萌しとして

淵明の日常性などを位置づけること、さらには奇想詩に潜在する危機意識がどのように表現として現実に力があつたのかなかったのか、もう一度表現と現実との本質的関係を、作家論として問いたい。

〈表現の力〉と〈現実への力〉との弁証法的な関係として、文学表現の価値についての問いとなろう。その場合には特に六朝時代にあつては詩に止まらず賦や種々の文の文学堂為全体への読み込みが求められるのである。

第四章 阮籍「詠懷詩」の韜晦表現

「詠懷詩」の難解さの在りどころを解き明かす。典故を用いた「つらい状態におかれた立場はわかつて、なぜそうならぬかが説明されない」、「異端の書からの出典が目だつ」、「典故が重層的に組み合わされて駆使されている」と。そして「詩人の立つ位置の視点がめまぐるしく変化し」三段で構成される表現構造を指摘する。其の九では、節義、時代批判、秋の凋落が。このように「歌詠の視点を屈折させた」「視点転換の三重構造が、一読してもわかりにくい詩篇にしてい

る」ともいう。心↓外↓心と構成され、韜晦的要素が強められる。さらには其の八の鳥の飛翔をめぐる詩をとりあげ、その寓話性の強い典故が重層的にしてかつひねって使用される韜晦表現であると分析し、そこに諷刺の志を貫こうとしているとする。特に評者には、外（現実）を見る視点を詠懷詩が内在化していて、その現実意識がさらに詩人の内面の深化に結び繋がっていくと読みとれた。

第五章 六朝の読書人 郭璞と干宝の複眼

動乱の時代を生きねばならぬ故に、「当面する時代の現実と向きあい、自己のなかの矛盾があるがままに見据えてたじろぐことなく、そのなかで紡がれた複眼の思想を所有するにいたつた」六朝の読書人のうち、郭璞と干宝を取り上げる。郭璞の「遊仙詩」は玄言詩一般とは異なり、世の中や人生の不条理を憤り、それを「艶逸な表現のなかにとこしこむことができた」。また干宝は「晋紀総論」での現実批判の視点と、「搜神記」（「晋紀」で事実をつづる記事からは見えてこない、

人間の真実なるものの姿）の編集熱意とを同時にもつ複眼を有していたとする。評者自身は、とりわけ郭璞が玄言詩一般から際だつところについて、詠懷詩という点から著者の初期の郭璞論を踏まえ、玄言詩が贈答という共通嗜好の場の産物であることと対置して考えを進めたいと思う。

第六章 酒の詩人 陶淵明

一 陶淵明と曹操

「人生短促の憂いを解消する酒」を歌うが、「両者の酒のとらえ方、歌いぶりは」、「スタジオにおける写真とスナップ写真の撮り方が全く違うのに似ている」。

二 陶淵明と竹林の七賢

陶淵明の詩には、竹林の七賢には無かった「酒中の趣き」があり、それは「暮らしのなかで、忘我、忘物の境地に遊ぶ」とする心の余裕が「あつたからである」とする。竹林たちには暮らしがない、暮らしが公的社会的であるのに対して、その枠外の空間での生活、つまり陶淵明の隠遁とそこでの豊かさを著者は酒で指摘しているのであるが、随想から論文にな

るにはどのように展開するか、われわれの課題は続く。

三 陶淵明と揚雄

陶淵明は「飲酒」其の十八に揚雄をうたうが、辞賦の大家には関心が向かわず、『漢書』の伝賛にしか記載されていない愛酒家で貧窮の生活を送る揚雄に共感したことに着目する。そこから愛酒家陶淵明の日々の酒好きを、愛酒家の著者ならではの、こまやかにして洒脱な視点と文章で綴る。

四 陶淵明と陸機

「定式的なスタジオ写真の描写の領域を出ない」陸機に対して、陶淵明の「スナップ写真」たる描写を対比し、伝統の中から陶淵明詩がどのように際だつかを言う。簡明な比較が文学史的な陶淵明の立つ位置をくつきりとさせている。

五 陶淵明と応璩

応璩を受け継ぐと言われる陶淵明を問題にする時、詩風について論究するのが一般的であるが、著者は「酒の肴」を問題にして展開させ、随想として出色の古典詩の味わい方を示した。結びは、「愛

酒家というより、さすがは酒好きの陶淵明だと思わせる」例に「挽歌」を引き合いに出す。この評言にも著者の日常が直接的に顔を出す、作家論への広がりがある。根っこはここにこそあると言わんばかりである。

第七章 陶淵明の躬耕と隠逸

隠逸の道がいかにつけわしいものであったかを陶淵明の心情から読みとる。その上で、「飲酒」「雜詩」などの複雑な詩を知らない陶淵明の全貌は窺えないとする戦後の淵明論の視点を、もう一度もどして「帰園田居」などがやはり「本質的な問題をはらんだ重要な詩篇である」と位置づける。ここには、高踏詩人と持ち上げるのでなく矛盾を抱えこんだ詩人とする戦後の詩人評価を、再度問い直し、あらためて「わかりやすさ」を評価しようとする陶淵明理解がある。それは研究の後戻りなのではなく、弁証法的に問い直すにはどのようなべきかに腐心する私たちの方向性の正しさを激励していると受けとめるのがよいだろう。

第八章 謝靈運の「賞心」について

小尾郊一論文が「賞心」を、「自然を賞する心」と(または「自然を楽しむ心の友」とか、いささか曖昧に)解釈するのに対して、「自分の心を識ってくれる人」「自分の心に適う友」と解するのがよいと、用例を分析する。その場合の「友」の具体的な名前や交友関係の姿に、蘭亭の清遊と通底する文化環境や、時代の政治的な視点がどのように見えてくるかをもう少し浮き彫りにするように展開させるのが私たちの一つの課題であろう。

第九章 謝靈運評価の一面

謝靈運の「山水詩は、政治的渴望を遂げられなかったことへの一種の補償行為であった」が「表現者として山水世界に生きる徹底した覚悟を獲得することができないまま、悲劇の生涯を閉じている」とする。ここでは陶淵明との比較、対句による名句の見事な表現力の説明、その奇にして意識的な描写、工夫の句づくりが分析される。また、「対句による彫琢工夫の鑿の跡」が六朝貴族文学の美意識の典型」となるが、「赤石に遊び進みて海に帆ほぶ」末句四句を老荘の玄言で結ぶ

ように、玄言詩の影響が色濃い。その哲学を「みずからをみつめる反省のことばとして心にしっかりと刻んでいたならば、棄市という非業の死をとげずにすんだであろう。」「つまるところ、単なる虚構の言辞にすぎなかったのではないか」とまで言う。それらの批判は同時代の六朝末には既に見受けられた（ただし評者には、冗長という批判であって現実との関係で言っているのではないと思われるが）。それに対して中唐・韋諷然『詩式』は風騷を受け継ぎ、魏晉建安をも超えるといひ、清・陳祚明『采菽堂古詩選』は「修辭主義文学の新しい旗手」と賞揚する。それに比して六朝の詩論家たちがこぞつて彼を批判するのは、「おそらく宋齊梁とつづく六朝時代の文学の危機的狀況にたいして、より敏感に、より責任を持つて反応していたからであろう。」無責任な反応でなく、危機を生きる同時代人の敏感な反応だとするのである。この結論についてはやはり、時代に対する危機意識が貫かれているとする論点が説得力を持たせている。

第十章 『世説新語』の清議と清談

『後漢書』党錮伝や逸民伝の資料と、『世説新語』の人物志としての資料との比較から、同じ後漢末名士たちの扱い方にどのような違いがあるのかを検討する。『世説新語』には、逸民の徐穉と党錮で殺される陳蕃との「両者の緊張した関係、党錮事件をからめた両者の思想と生き方の違いは、いつこうにつたえられていない。」「李膺の宦官の悪虐にたいしておこなった勇氣ある抵抗の記録は、『世説新語』のどこをさがしてもみつからない」「骨抜き性格」だと断ずる。そこからは、「清議」よりも「清談」を重んじた、「名節」よりも「隱逸」を重んじた劉宋期の思想とその語り口を読みとることができるのである。」「清議」「名節の士」が後漢末の腐敗した政治社会と清烈にかかわった生き方とか、ものの考え方は、まったくといっていいほどとりあげられずに、隱逸を慕い、機智にとんだ人物批評を好んだ「清談」家の趣好に投じた「清議」名節の士の逸話のみが語りつたえられている。」そこに、「劉宋時代

の文学所産の思想的性格があらわれている」と結ぶ。劉宋における貴族層の変容、成り上がりの実力者達と旧来貴族（謝靈運）とのギャップ等、史学での展開がさらに著者の指摘を深めることであろう。また、文学では、当たり前すぎるが、上のような時代状況の歴史的な判断の上にのっとりつつ、それぞれが資料的価値だけでなく、きわめてリアルな場としての機微細やかな心情のやりとり空間であることを加味すれば、さらに文学的な感興が自立した時代的な意味について視野を複合的に設定することもできるだろう。

第十一章 裴松之の『三国志』注と志怪

小説

『三国志』注の志怪説話の類が本伝の記事とどのような関わりをもってきたか。史実を更に多角的、多方面に照らし出すことに成功しており、そこに、多くの見聞を検証していけばより史実に到達できるとする、裴松之独自の論証的歴史観を見ることができると評する。麋竺の好人物ぶりの説話を紹介した後、「運不運の別れめは、ここにあった」等、人間

観を指摘するだけでなく、それを一生の判断として言い切る文章と切り離せない、著者の成熟した人間観・諦観が伝わる。堅苦しくなく、高級な論文にはこのような文章が必須であることをあらためて思い知る。

第十二章 『南斉書』 文学伝論の位相

『南斉書』文学伝論が沈約らの音韻論に共感し、その影響下にあり、また、『詩品』へと受け継がれていくと位置づけ、次の諸点を明確にする。(1)文学作品には機見(発想)から覚悟(興趣)のそれぞれ個性がある。(2)音韻重視。五言を上手く取り入れたリズム感。(3)五言詩の史的展望。五言詩を別枠として扱う(特別視する)先鞭を付けた。(4)〈今日的な文学状況〉の三派として、謝靈運・庾信・鮑照。(5)陳腐ではない新しさを求め、その「文学新変論を検証」し、その「文章進化論は『文選』序に影響を与えている。」(6)沈約にはない文学批評の歴史を辿る文学史簡論。

最後に本書全体についての評者の感想

を述べておこう。なぜに〈覚書〉なのか。評者にとつて覚書とは、文学の困難さが少しでも見えてくるための接近を意味し、単なる備忘録ではない。ということは、文学とは何かを根源的に問いながら、しかし答えを性急に単純化して引き出してくる類の論考ではないということだ。

文学は主張ではない。文学はアプリオリなものではない。それは研究者にあつても然りだ。いや研究ならばこそそのように身構えなければならぬ。覚書という題に評者は共感する、「掘りかへし耕しなほす時だ今」なのだ。著者はあとがきで「いづれ滅び去る」時間の中にいる生と死の不条理について語る。そう、「仇」は時である。「洪水が残したこの土地に、鋤鍬把つて掘りかへし耕しなほす時だ今」(ボードレール「仇」・堀口大学訳)のあらがいが証となる。著者自身の内部の、同時にまた著者を受け継ぐと決意した私たちの内部のあらがいであるから、気の利いたコメントで終わらせてはならない。それが先行く人への礼儀であり、固有の他者として対峙し、挑むものの思

想というものである。私たち自身の思想が問われているのだ。

六朝文学研究における戦後からの流れの時間という「仇」に抗してもう一度、冒頭に引いた著者の原点に帰り、そこからの展開を課題にしよう。課題は大きく山ほどあるが、根源を逃げる研究は六朝文学研究ではない。そもそも六朝文学が要請する課題なのであるから。(1)作家論はどのように可能か。(2)現実と文学の本質的關係。(3)虚構なるものの必然性。(4)文学論、史書編纂、志怪小説だけでなく、賦や論などの散文を含めた全体的営為への視野。(5)文学史の課題、とくに六朝美文の問題。修辭表現。いかに書くかということの中にしか、表現における思想はないと認識する評者にはとりわけの課題。(6)なぜに六朝文学研究なのか。(7)文学はアプリオリにあるのではなく、創るもの、新たに引き出すもの、そこではじめて文学の価値が私たちの内部で問える。等々。

(おがみ・まさみ 青山学院大学)